

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12446

研究課題名(和文)ドイツ語で行なわれる器楽レッスンにおける指導者-学生間の会話分析

研究課題名(英文)Analysis of teacher-student conversations in instrumental music lessons in German

研究代表者

牛山 さおり (USHIYAMA, Saori)

立教大学・外国語教育研究センター・教育講師

研究者番号：40649589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語で行なわれる器楽レッスンにおいては、部分的に韻律的な歌唱を取り入れる会話、演奏のみで応答する会話など様々な種類の会話が見られる。会話で使用されていた音楽用語、テーマを特徴別に考察し、音楽を専攻する学生にドイツ語教育がどのように貢献できるのかを検討した。さらにレッスン会話において、教員からの指示の仕方、学生-教員間の質問会話を中心に分析を行った。結果として、学生の表現意図が伝わりきれないときなどに、教員からの抽象的な質問も多くなることが明らかになった。なお、収録データの一部はFOLK(研究および教育用の話し言葉コーパス)のデータバンクに、正式に登録された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究で得られた知見は、音楽を専攻する学生を対象とする授業において導入されている。学生にはレッスンにおいて、表現意図を言語化して求められる場面が多いこと、そして曲の背景を把握し、適切な会話を構築するためには、歴史や宗教などという関連領域への興味・関心を広げることの重要性を伝えている。外国語で表現意図を言語化するには、母語でも表現意図を言語化することの大切さに気付く必要性も高い。本研究の方向性は、ドイツ語圏の大学に音楽留学をしたい学生、および学生を指導する先生方のニーズにも合致している。またFOLKに収録された会話コーパスも、言語教育研究などへの応用が見込まれる。

研究成果の概要(英文)：In instrumental music lessons conducted in German, various types of conversations can be observed, including conversations that partially incorporate prosodic singing and conversations in which the student responds only to the performance. The musical terminology used in these conversations was extracted, characterised and examined to see what contribution it could make to German language learning for music students.

In the lesson conversations, the analysis focused on the way the teacher gave instructions and on the student-teacher question conversations. As a result, it was found that many abstract questions were also asked by the teacher, for example, when the students' expressive intentions were not fully conveyed. Some of the recorded data were officially registered in the FOLK databank.

研究分野：ドイツ語

キーワード：会話分析 器楽レッスン ドイツ語 外国語教育

1. 研究開始当初の背景

器楽を専攻する学生にとって、ドイツ語は楽譜や曲名、音楽用語などで比較的身近な言語であり、ドイツ語を学ぶことは、作曲家の母語の構造やリズムを知ることは、演奏表現がより豊かになることにもつながる。そのような背景のもと、専攻する楽器に拠るが、ドイツ語を未習の段階で、あるいは CEFR 基準 A1 から A2 の段階でドイツ語圏のマスタークラス、あるいは個人レッスンなどに参加し、演奏家による指導を受ける学生も存在する。

研究代表者は、どのようにドイツ語教育が音楽家養成に寄与できるのかを検討するため、マスタークラスなどに参加した後の学生、および留学経験をもつ教員にインタビューを行ったところ、ドイツ語で行われる器楽レッスンの内容をより詳細に知る必要性を感じた。同時に、日本語を母語とする学生は、実際のレッスンでどのように振る舞い、会話を展開しているのだろうか、という点を知ること、異文化理解という側面からも重要であると考えた。

今までにもオーケストラのリハーサル (Weeks 1996 Parncutt 2002、丸山 2001)、音楽レッスン (Tolins 2013)、器楽のマスタークラス (Haviland 2007, Szczepiek Reed et al. 2013)、合唱団の練習 (Merlino 2014) といった特定の文脈で、指揮者あるいは指導者の言語・非言語コミュニケーションが、マルチモダリティの観点からも研究対象となっている。

そこで今までに、ドイツ語で行なわれる公開レッスン、マスタークラスなどの映像資料などを調べた結果、演奏の記録が主な目的であるということ、さらに教員と学生の間に通訳が入ることも多々あるため、言語学的な分析に適した資料は極めて少ないことが判明した。

2. 研究の目的

上記のような理由により、ドイツ語で行われるレッスンの会話を分析するには、新たにコーパス資料を作成する必要性が生じたため、本研究ではドイツ語圏の音楽大学で行われるレッスンを録画・収録することにより、その特徴を明らかにする。

レッスン会話とは、教員と学生という異なる役割をもつ会話参加者がかかわり、互いに調整、協力することで「演奏をより良いものにする」という特定の目標に向けられるものである。外国語で行なわれるレッスンにおいて、日本語を母語とする学生はどのように振る舞い、会話を展開しているのだろうか。実際に参加しようと考えている学生であれば、今まで母語で無意識に行なっている様々な振る舞いに、改めて意識を向ける必要があるだろう。外国語で行なわれるレッスンの特徴を知ること、異文化理解という側面から極めて重要であると考えられる。

そして、在独日本人留学生のドイツ語力に関する先行研究は、中野 (2015) で指摘されるように、未だに少ない。本研究ではドイツに音楽留学をしている大学院生の、実際の言語使用を明らかにするという目的もある。

3. 研究の方法

本研究ではドイツ語を母語とする教員と、日本語を母語とする大学院生の間で行なわれたレッスンの会話を対象とする。実際の自然会話を録音、文字化し、データに内在する証拠を経験的に見ていくことで、会話参加者間における相互行為の内容を明らかにすることを試みる。

まずは 2018 年度に、ドイツ語圏から来日する演奏家 3 名 (ホルン、パイプオルガン、ヴァイオリン) の個人レッスン、マスタークラスを参観することを予備調査として行なった。研究方法を検討することに加え、対象を弦楽器に限定することを決定した。

そして、2019 年春からは、本調査として複数の大学において、ドイツ語を母語とする教員と日本語を母語とする学生の間で行なわれる器楽レッスンの映像と音声を収録した。

レッスンは遮音性の高いレッスン室で行なわれ、1 回のレッスン 1 時間 30 分前後である。2019 年春に映像資料として収集し、2020 年春からは音声資料のみを収集することになった。録音したデータは 44.1kHz、16bit で量子化し、ドイツ語母語話者による転記作業を行った。さらに詳細について検討が必要な箇所については、音声情報を基に GAT 2 (Selting et al. 2009) による転記を作成、より詳細に分析を行なった。

当初、マルチモダリティの観点から映像も収集予定であったが、COVID-19 の流行に伴って予定を変更したため、音声データを中心に検討を進めていった。なお、会話転記者の聴覚印象に基づいて転記された文字化データを基に、不明瞭な点に関しては音声分析ソフト Praat (Boersma / Weenink 2020) を使用して音響音学的にも確認を行なった。

4. 研究成果

レッスンは、大きく分けて「導入部」と「展開部」から成ることが明らかになった。「展開部」において、「学生の演奏」「教員のコメント」「学生の応答」という会話および演奏の連鎖が、全てのデータに繰り返し観察された。

課題曲によっては、小節単位を丁寧に何度も繰り返すこともあったが、問題点が解決されたといった場合には次の演奏箇所に進む。このような会話と演奏の連鎖が繰り返し観察され、課題曲の楽章ごとに展開部を繰り返す構成が明らかになった。レッスン時間が終わりに近づくと、会話参加者が互いにその状況を了承し、会話も終了へと向かっていた。

なお、教員・学生両方の会話には、演奏、韻律的な歌唱も頻りに用いられていたことが特徴であり、これこそが器楽演奏を扱う場面に特有なコミュニケーションスタイルと言えよう。これらの非言語コミュニケーションは、楽譜に基づく音程、音の長さ、音色、曲の雰囲気などの抽象的な情報を補う、場合によっては言語よりも明確に伝えるための役割を果たすと考えられる。

(1) 会話に頻出するテーマ

会話コーパスにおいて、弦楽器の特性上、弓と弦の使い方、技術面に関する会話が全体的にも多く見られた。ただしそれ以外にも、曲の歴史的背景、宗教的知識、作曲家、民族音楽といった関連する話題が頻出し、同時に演奏箇所や年号といった数詞の使用頻度も高かった。特に数詞は、レッスンや合奏において指示を聞いてすぐに演奏箇所を把握することにもつながるため、比較的早い段階から、できれば授業において通年で数字に触れる機会を増やすことが有益であろう。

(2) 学生からの質問会話にみられた特徴

学生からの質問に着目して分析した結果、演奏位置、音楽用語などを確認する質問、教員のコメントで使われていた単語の意味を尋ねる質問、より良い演奏をするための質問の3つに区分された。

特にに関して、音の高さや明暗といった抽象的な内容に関して、研究対象とした学生はできる限り自分の考えを言語化して伝え、より良い演奏へ向かおうとする会話を展開していた。教員の質問に関して不明な点があれば、適切な形で聞き返しが行なわれ、敬意を欠くことがなく、極めて自然なやり取りであった。相互理解のために聞き返す、あるいは内容を確認する発話を挟むなど、重層的な会話の連鎖も確認された。

学生は教員のコメントを一方向的に聞くだけに留まらず、積極的に会話を続けることが出来ていた。自分が弾いた音が良い響きだったのか、曲としてはどう聴こえるのかということを一瞬に意識し、問題点を把握して修正・改善するために必要となる会話を展開し、学習者として適切な振る舞いが確認された。

(3) 教員からの質問会話にみられた特徴

レッスンの間、学生の演奏を聴いた教員は、瞬時に消えてしまう演奏の中から、指導すべき修正点や改善策を部分的かつ具体的に伝達している。教員からの質問は、演奏位置などを確認する質問、学生の知識あるいは経験を問う、あるいは確認する質問、表現意図を探る質問の3つに区分できる。とりわけ学生の表現意図が伝わっていないと想定される場面においては、

の質問として、例えば「ここをどう思って弾いている?」「色で例えると何色?」「音の明るさをどうしたいの?」といった抽象的な質問も多くみられている。質問内容が学生に伝わりづらいときには、韻律的な歌唱などを伴って提示するなどして、表現を少し変えて言い直すなどの工夫を施すことで、学生の意見を引き出そうとする態度が見られた。

同じ箇所や音を何度も弾き、イメージや考えを交わしながら教員と学生が理想とする音に近づいていく相互作用のプロセスは、非常に興味深い。学生がどのように弾きたいのかを明確に伝え、音や曲の解釈を言語化して語るからこそ、ドイツ語で行なわれるレッスンの特徴であると考えられる。

学生が演奏や表現したい音や演奏の解釈を外国語で言語化できるようになるためには、まず母語で音楽を理解する上での言語の重要性に気づき、言語化する訓練を積むことが大きな意味を持つ。さらに教員としては、学生にドイツにおける学びの在り方、自分の考えを言語化して主張する文化的背景を伝えることが、ドイツ語で受ける器楽レッスンを理解する上で極めて重要となる。楽器を通して感情を表現する音楽、言語と異文化理解の充実、社会の文化的成熟度を

高め、精神的豊かさをもたらす端緒になると考える。

4) コーパスの構築

本研究に関連して実施した、国際共同研究として 2020 年 4 月より、収録データの一部は Leibniz Institut für deutsche Sprache, DGD (Datenbank für gesprochenes Deutsch, ドイツ語の話し言葉コーパス) FOLK (Forschungs- und Lehrkorpus Gesprochenes Deutsch 研究および教育用の話し言葉コーパス)のデータバンクに、正式に登録された。今後、言語教育研究などにおいて、応用が見込まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 牛山 さおり	4. 巻 17
2. 論文標題 ドイツ語で行なわれるレッスン会話の構造と教授者 - 学生間における質問発話に見られる特徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 59-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 牛山 さおり	4. 巻 17
2. 論文標題 器楽を専攻する学生および高校生のためのドイツ語教育	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛山 さおり	4. 巻 15
2. 論文標題 器楽レッスンのドイツ語発話分析のための予備調査 あるホルン個人レッスンの場合ー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

会話コーパス

Forschungs und Lehrkorpus gesprochenes Deutsch
https://dgd.ids-mannheim.de/dgd/pragdb.dgd_extern.welcome

Datenbank fuer gesprochenes Deutsch
https://dgd.ids-mannheim.de/dgd/pragdb.dgd_extern.welcome

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Leibniz Institut fuer deutsche Sprache	Hochschule fuer Musik Nuernberg		
スイス	Musik-Akademie der Stadt Basel			